

命をいただく

心を込めて「いただきます」

---

熊本食肉加工センターの坂本さんの職場では毎日たくさんの牛が殺され、その肉が市場に卸されている。牛を殺すとき、牛と目が合う。そのたびに坂本さんは、「いつかこの仕事をやめよう」と思っていた。

ある日の夕方、牛を乗せたトラックがセンターにやってきた。しかし、いつまで経っても荷台から牛が降りてこない。坂本さんは不思議に思っただけで覗いてみると……、一〇歳くらいの女の子が、牛のお腹をさすりながら何か話し掛けている。その声が聞こえてきた。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃんごめんねえ。ごめんねえ……」

坂本さんは思った、「見なきゃよかった」

女の子のおじいちゃんが坂本さんに頭を下げた。

「みいちゃんはこの子と一緒に育てました。だけん、ずっとうちに置いとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんと、正月が来んとです。明日はよろしくお願いします・・・」

坂本さんは「もうできん。もうこの仕事はやめよう」と思った。      明日の仕事を休む

ことにした。

家に帰ってから、そのことを小学校の息子、しのぶ君に話した。しのぶ君はじつと聞いていた。

一緒にお風呂に入ったとき、しのぶ君は言った。「やっぱりお父さんがしてやってよ。心の無か人がしたら牛が苦しむけん」

しかし坂本さんは休むと決めていた。

翌日、学校に行く前に、しのぶ君はもう一度言った。「お父さん、今日は行かなんよ！ 行かんといかんよ！」

坂本さんの心が揺れた。そしてしぶしぶ仕事場へと車を走らせた。

牛舎に入った。みいちゃんは坂本さんを見ると、他の牛と同じように角を下げて威嚇するポーズをとった。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんとみんなが困るけん。ごめんよう」と言うと、みいちゃんは坂本さんに首をこすり付けてきた。

牛を殺すとき、動いて急所をはずすと牛は苦しむ。坂本さんが「じつとしとけよ、みいちゃんじつとしとけよ」と言うと、みいちゃんは動かなくなった。次の瞬間、みいちゃんを目

から大きな涙がこぼれ落ちた。牛の涙を坂本さんは初めて見た。

そして、坂本さんがピストルのような道具を頭に当てると、みいちゃんは崩れるように倒れた。

後日、おじいちゃんが食肉加工センターにやって来て、しみじみと言った。

「坂本さんありがとうございました。きのう、あの肉は少しもらって帰って、みんなで食べました。孫は泣いて食べませんでした、

『みいちゃんのおかげでみんなが暮らせるとぞ。食べてやれ。みいちゃんにありがとうと言つて食べてやらな、みいちゃんがかわいそかろ?』って言うたら、

孫は泣きながら『みいちゃん、いただきます。おいしかあ、おいしかあ』て言つて、食べました。坂本さん、ありがとうございました」

坂本さんは、もう少し、

この仕事を続けようと思った。

熊本県のある小学校で、助産師として2500人以上の命の誕生の瞬間に立ち会っている内田美智子さんと、毎日牛を解体して食肉にしている坂本義喜さんのお話を聴くという授業があつた。

坂本さんの話を聴いて感動した内田さんが、坂本さんをお願いしてこの話を絵本にさせてもらった。それがこの『いのちをいただく』です。

この絵本のあとがきに、内田さんはこう書いています。

「私たちは奪われた命の意味も考えず、毎日肉を食べています。自分で直接手を汚すこともなく、坂本さんのような方々の悲しみも苦しみも知らず、肉を食べています。『いただきます』『ごちそうさま』も言わずに『ご飯を食べることは私たちには許されないことです。食べ残すなんてもつてのほかです・・・』」

そう、私たちは命を食べて生きているのです。今日いただくいのちに・・・合掌。